

東北町のナガイモ生産について —その現状と将来—

加 茂 宗 博

I は じ め に

輸送機関の発達には、いわゆる輸送園芸地域と呼ばれる新しい野菜産地を形成した。本稿は、青森県内の野菜産地の中で、特に、ナガイモの生産高が第1位である上北郡東北町を取り上げ、そのナガイモを中心とする野菜生産と自然条件の関係及び、生産・流通の現状を明らかにするとともに、将来の展望を含めた若干の考察を行おうとするものである。

方法としては、1980年世界農林業センサス農業集落カードなどの資料及び、アンケート調査、聞き取り調査の分析を主とした。

II 東北町の概観

東北町は、青森県東部の上北郡に属する、面積 209.72 km^2 、人口 1 万 2653 人の町である。
(昭和 59 年現在)

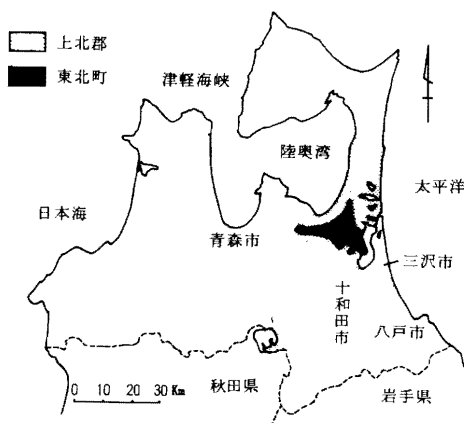


Fig.1 研究地域の概観

町の西端部は奥羽山脈に続く山岳部であるが、大部分は標高 50 ~ 140 m の丘陵・台地となっており、川沿いの低地がそれらを区切っている。大部分は火山灰土で、酸性度の強い磷酸欠土壤である。最低気温は -12℃ 前後、最高気温 32℃ 前後で、年降水量は約 1,500 mm である。6・7 月にはヤマセが吹き、農作物に多大な被害を与えることがある。

東北町の本格的な開拓は、昭和 22 年の国営北部上北大規模機械開墾に始まり、その歴史は、農業発展の歴史であるといえる。

III 東北町の農業

東北町は、農業就業者率 64.1% と、農業的色彩が非常に強い。町全体で見ると、米・畑作物・畜産物の割合がほぼ均衡のとれた状態にあり、概して 3 部門複合型の経営形態であると分類されがちであるが、集落ごとに見ると必ずしもそうなのではない。(Fig.2)

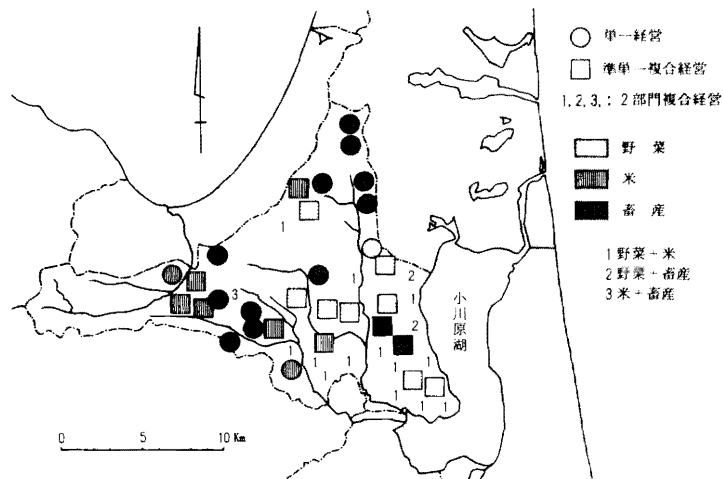


Fig.2 農業粗生産額からみた集落別経営形態

(1980年世界農林業センサス農業集落カードより作成)

単一経営；総粗生産額のうち1部門で60%以上を占めるもの。

準単一複合経営；1部門で60%以上を占める部門がないもので、30%以上の部門が一つあるもの。

二部門複合経営；1部門で60%以上を占める部門がないもので、30%以上の部門が2つあるもの。

1戸当りの平均耕地面積が特に広い集落では、畜産の単一経営に偏っている点も考え合わせると、東北町の平均的農家は、米と畑作物を生産しており、一部畜産物の生産が卓越する地域が存在すると考えられる。

東北町は、森林が多く町の全面積の64.4%を占める。ゆるやかな斜面や台地、凹地では畑作（6.6%）が行われ、根菜類を中心とした様々な作物が栽培される。北部では、牧草を中心とする飼料作物（12.4%）が栽培され、酪農の基盤となっている。水田（7.6%）は、清水目川、赤川、土場川流域の低地に広がっている。

東北町では、かつて麦・雑穀、豆類、工芸作物が多く栽培されていたが、わずか四半世紀の間に、特に昭和45～50年を境として大きく変化し、現在は、根菜類、いも類がその多くを占めている。(Fig.3) この原因としては、東北町の自然環境に、地中で生育する作物が適していたことに加え、昭和47年に、国の野菜指定産地に指定されたことがあげられる。

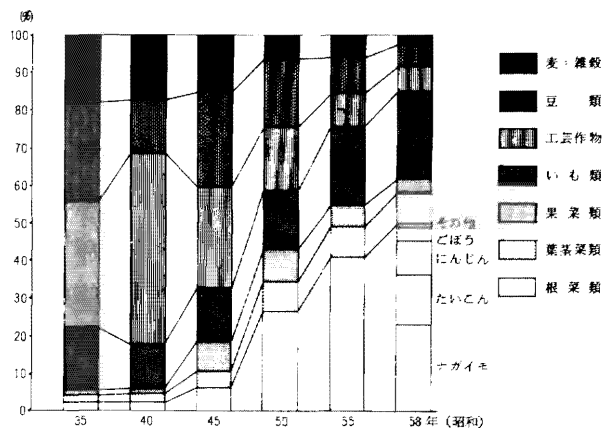


Fig.3 普通畑における品目別作付面積比の推移
(東北町役場資料より作成)

Ⅳ 東北町のナガイモ生産

(1) ナガイモ生産の歩み

青森県のナガイモ栽培は、昭和 35 年頃に三八地区に導入されたのが最初で、東北町では、昭和 40 年頃から栽培されるようになった。その後、東北町の自然環境に適している。手近かな換金作物である、他作物に較べて価格が良く安定しているなどの理由から徐々に広まって行った。

昭和 53 年になると、甲地
(かっち)地区に真空予冷装 作付面積 (ha)

置を備えたナガイモ貯蔵庫
が完成し、通年出荷が可能
となったため、栽培面積は
それまでの 3 倍に増加した。
しかし、生産量の急増は価
格の暴落をまねき、翌年か
ら生産調整を行わざるを得
なくなり、以後 350 ha 程度
に落ち着いている。(Fig. 4)

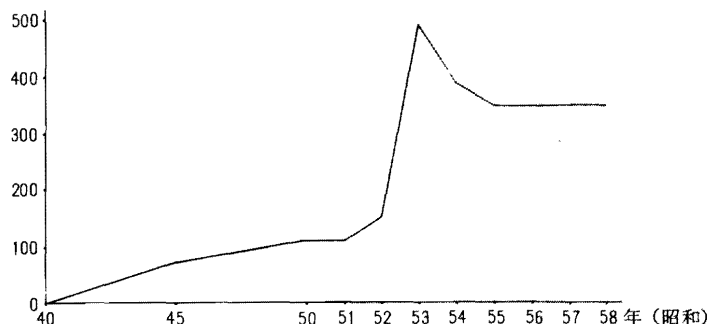


Fig. 4 ナガイモの作付面積の推移
(東北町役場資料より作成)

(2) ナガイモの生理的特性と栽培方法

ナガイモは、つる性の宿根草で雌雄異株である。一般に耐寒性が弱く、高温多湿を好むヤマノイモ類の中において、比較的低温性でいもの肥大が早いことから、ナガイモは、青森県をはじめとする東北各県、茨城県、長野県、北海道など多く栽培されている。

ナガイモは、肥大根が地中深く入るため、耕土が深いことが要求されるが、この条件を満たせば土壌適応性はきわめて広い。しかし、いもの形状は土壌条件に大きく支配され、砂土や火山灰土などの軽鬆な土壌では、形状がきわめて良いものが生産される。この土壌適性に加え、ヤマセの影響を受けにくい根菜類であること、栽培労力が米をはじめとする他作物と干渉し合わないことなどから、東北町では、地形的制約により畑作が不可能な地域、地質的に良質ないものが栽培できない水田地域、労働力を大きく裂くことのできない酪農中心の地域などを除いて広く栽培されている。

ナガイモの栽培には様々な作業があるが、最も

月	旬	生育状況	主な作業	作業の回数									
				種	子	播	種	肥	肥	種	肥	種	肥
3	上中下	栽培準備期	種いもの準備										
4	上中下	栽培準備期	基肥・追肥										
5	上中下	栽培準備期	種いもの準備										
6	上中下	栽培準備期	種いもの準備										
7	上中下	栽培準備期	種いもの準備										
8	上中下	栽培準備期	種いもの準備										
9	上中下	栽培準備期	種いもの準備										
10	上中下	栽培準備期	種いもの準備										
11	上中下	栽培準備期	種いもの準備										
12	上中下	栽培準備期	種いもの準備										

Tab. 1 ナガイモの作業時期とその労働
(東北町役場資料より作成)

多くの労力を必要とするものは収穫作業である。(Tab.1) 現在これは、機械で行われており、手掘りの時代に較べて格段の作業能率をあげている。収穫時の傷の発生が増加したことも事実であるが、機械の導入による栽培面積の増加が、産地形成に大きな役割を果たしたといえる。又、種いもの準備及び後仕末は、病気・連作障害などを防ぐ上で特に大切な作業である。

ナガイモは、普通2～5年の連作が行われているが、これは連作障害の発生という危険を伴っている。しかし、連作によって耕土が柔らかくなり、形状の良いものが生産されるようになるというメリットもあることから、農家は土と相談しながら連作を行っているというのが現状である。

(3) 生産農家の取り組み

各農家のナガイモの栽培面積は、自家用のわずかなものから、100 aを越えるものまで様々であるが、40～60 aの農家が大半を占めている。このことより、ナガイモ栽培に必要な機械を各1台保有し、2～3人の家族労働力による栽培を行うというモデルを考えることができるが、これは、機械1台当たりあるいは労働者1人当たりの可能栽培面積によって説明される。

東北町の普通畑の作物は、根菜類・ばれいしょを中心として多様であるが、その組み合わせは各農家の経営方針によって様々である。

ナガイモ栽培に対する考え・意欲も様々であるが、連作障害による品質低下や土壌破壊、収益性の低下からの悲観的なものと、他作物より高い収益性、安定した価格、完成・定着した栽培技術からの楽観的なものに大別される。これは、栽培への取り組み方にも反映し、営農指導の受けとめ方、作業の緻密さも様々である。

V ナガイモの流通とその問題

(1) ナガイモの流通と青森県経済連の役割

東北町のナガイモは、その大部分が県経済連を通じて系統出荷されている。出荷は、各支所ごとに行われているが、支所間の競合を防ぐため、各週の出荷割当てが決められており、各支所は、その範囲内で管内の農協に出荷量を割当てている。

市場への輸送は、民間の7運送会社から成る“輸送協力会”に委託されている。各支所の指示によって、各農協の選別場・貯蔵庫から、直接市場へと輸送されている。

現在、大市場では、大きな取引引きが中心となっており、ある程度以上の数量の揃っていることが必要である。そのため、数量の多い品が“力”を持つ様になってきている。青森県産のナガイモは、整った共販体制の下での出荷によって、この“力”を持っているといえる。市町村単位で見た場合に、東北町産のものが特に人気があることも、この数の“力”を持っているためと考えられる。

(2) 市場におけるナガイモの動向

東京都中央卸売市場における、ナガイモの取扱い数量と価格の変化を見ると、昭和53年からの過剰生産による価格暴落の様子がよく分かる。その後、出荷量が減少したため55年頃から価格が持ち直し、56年には従来以上の高値も記録されたため再び出荷量の増加が起こり、58年からは、再度

供給過剰による価格の低下が起こっている。(Fig.5)

ナガイモは、嗜好品的な色彩が強い特殊野菜に分類され、その需要はほぼ一定している。そのため、供給量の変化が直接価格に影響を与え、前述の様な激しい価格変動が起こり易い。又、高級野菜として高値で取り引きされるナガイモは、その生産が急激に減少することは考えられず、今後も低値安定が続くと予想される。

ナガイモの価格を産地別に見ると、常に青森県産のものが最高値を示している。これは、その品質が優れているためであり、量の面での優位性を“力、”とするならば、この品質面での優位性は“信頼、”であるということができる。

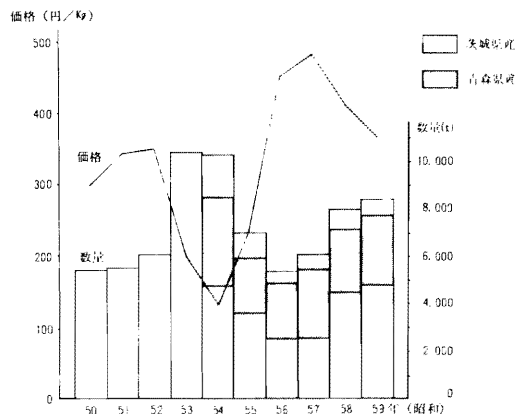


Fig. 5 東京市場におけるナガイモの出荷数量と価格の関係
(東京都中央卸売市場年報より作成)

Ⅶ ま と め

高速交通体系の完成によって、産地間競争が激化することが予想される。“力、”と“信頼、”を合せ持つ東北町であるが、生産意欲の薄れ始めている生産者も出てきている現在、これは厳しいものとなるであろう。しかし、厳しい自然環境下において、これといった代替作物の無いこの地域にとって、この競争は引くことのできないものである。生産農家・農協などの今後の取り組みが注目されるところである。

最後に、本稿を作成するに際して御助言を賜った、今井先生、水野先生、後藤先生と、調査及び資料収集に御協力いただいた、東北町役場、青森県経済連十和田支所、東京都中央卸売市場、そして東北町のナガイモ栽培農家の方々に厚く御礼申し上げます。

【参 考 文 献】

- 乙山広政（1974）：青森県東北町における土地利用について 弘大地理 10，40～44
- 坂本英夫（1981）：北海道北見地方におけるタマネギ生産の立地 人文地理 33－5，21～40
- 渋谷文隆（1984）：利根川中流部の野菜産地の形成と土地条件—群馬県尾島町のヤマトイモ栽培を例として— 新地理 32－1，13～25
- 東北農政局青森統計情報事務所（1981）：図で見る市町村農業のすがた
- 三上美智子（1978）：野菜の流通形態と産地の性格 地理 23－3，49～58